

「気がふれたジェインの歌」 小論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): イエイツ, 狂気, リフレイン, ことばの多義性, 価値関係の逆転 キーワード (En): 作成者: 宮内, 弘 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2004932

Title	「気がふれたジェインの歌」小論
Author	宮内, 弘
Citation	人文研究. 27 巻 10 号, p.668-682.
Issue Date	1975
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	丹羽千年教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

「気がふれたジェインの歌」小論

宮 内 弘

(I)

イエイツの後期の詩集「音楽になるかもしれない詩」“*Words for Music Perhaps*”の最初の七編の詩は一般に「気がふれたジェインの歌」“*Crazy Jane Poems*”として知られ、その大胆であからさまな言葉使いやジェインの人を食ったような態度は、それに続く無垢な少年少女の愛を扱った七編の詩と著しい対照をなしている。この一連の「気がふれたジェインの歌」の中でイエイツは女の狂人ジェインの口を借りて、これまで詩人の心を捉えて離さなかった肉体と精神の問題を原点に立ち返りながら追求しているとする事ができよう。これらの詩に共通する登場人物は肉体を唯一のより所として奔放に生きてきた語り手であるジェインと彼女の死んだ恋人ジャック、それに精神の重要性を説き肉体を軽蔑する僧正の三人である。その他不必要なものはすべて切り捨てられ、詩のことばも簡潔で、しかも反理性的な女の語りにふさわしい平易な日常語に限られている。

一般に狂人を主人公にした文学作品では、狂人の口を借りて、常人が見落しかねないような非常に基本的な真理を、逆説を利用しながら読者に印象づける手法がよくとられるが「気がふれたジェインの歌」も例外ではない。この点では conventional なものに違いないが、それにもかかわらず、これらの詩が新鮮に感じられるのは、言葉の多義性をうまく利用したレフレインや鋭い逆説による所が大きいと思われる。本論ではレフレインや言葉の多義性に注目しながら「気がふれたジェインと僧正」“*Crazy Jane and the Bishop*”「気がふれたジェイン神について語る」“*Crazy Jane on God*”「気がふれたジェイン僧正と語る」“*Crazy Jane Talks with the Bishop*”を中心に見ていきたい。¹

(II)

「気がふれたジェインと僧正」は「気がふれたジェインの歌」の最初の詩

にふさわしく、ジェインの個性が充分にでたおもしろい詩である。とりわけレフレインがすばらしく、この詩のおもしろさもレフレインの巧みな使い方から来るといっても過言ではあるまい。

まずレフレインはジェインの語りの影の声として働くため、語りと影の声が互いに反響しあい、我々はさながら和音を聞いている様な気分になる。この両者の声の関係は連が進むにつれてたえず微妙に変化し、同時に始めあまり明らかなでなかったレフレインの意味が次第に明確になるしくみになっている。さらに特筆すべきはレフレインは遠く隔った二つの部分から成り立っているにもかかわらず、“tomb”, “comb” と eye-rhyme を踏みながら密接に結びついている点だろう。

(*All find safety in the tomb.*)

The solid man and the coxcomb.

長母音、二重母音を主とした最初の部分と子音を中心に組み立てられたテンポの速いあとの部分との音、リズムの対照もさることながら、それぞれが互いに作用しあいながらだんだん詩のテーマを形成していくさまは他の詩ではちょっと見られないほどうまくできているように思う。以下実際の詩にあたりながら見ていこう。

Crazy Jane and the Bishop

Bring me to the blasted oak

That I, midnight upon the stroke,

(*All find safety in the tomb.*)

May call down curses on his head

Because of my dear Jack that's dead.

Coxcomb was the least he said:

The solid man and the coxcomb.

Nor was he Bishop when his ban

Banished Jack the Journeyman,

(*All find safety in the tomb.*)

Nor so much as parish priest,

Yet he, an old book in his fist,

Cried that we lived like beast and beast:

The solid man and the coxcomb.

The Bishop has a skin, God knows,

Wrinkled like the foot of a goose,

(*All find safety in the tomb.*)

Nor can he hide in holy black

The heron's hunch upon his back,

But a birch-tree stood my Jack:

The solid man and the coxcomb.

Jack had my virginity,

And bids me to the oak, for he

(*All find safety in the tomb.*)

Wanders out into the night

And there is shelter under it,

But should that other come, I spit:

The solid man and the coxcomb.

第一連は僧正に呪いをかけるために、「枯れた樫の木所へ連れて行ってくれ」というジェインの謎めいた言葉で始まっているが、一体樫の木は何を表わしているのだろうか。この疑問を解くかぎはレフレインの“The solid man and the coxcomb”の中にあるようである。そこでレフレインから考えてみよう。その一行前に「伊達男なんて最低だ」といった僧正のことばから容易に推察できるように “coxcomb” は伊達男であるジャックを, “solid man” は僧正を表わし, 前者の “coxcomb” は「うわべだけを飾りたてながら女遊びに夢中になる, 中身のない男」であり, 後者は反対に「信頼できる, しっかりした男」ということになる。しかしながらこの意味は, 僧正によって代表される “crazy” でない一般社会の倫理観を色濃く反映していて, 決して普遍的価値観ではかられたものでない事は心にとめておかなければならないであろう。

次に樫の木であるが, 周知のように樫の木は堅く, がっしりとしていて一般の社会通念が認める僧正のイメージ (“solid man”) と合致している。

さらにまた櫛の木を形容している “blasted” の一つの意味「呪われた」は「僧正の頭に呪いをあびせてやる」というジェインのことばを先どりした prolepsis (予期的賓辞法) の一例だと考える事も充分可能である。以上見てきたように、櫛と僧正との間には密接な対応関係があり、櫛は暗に僧正を表わしているのではないかと思われてくるのである。

ところで第二連に入るとなぜジェインが僧正に呪いをかけなければならないかという事がしだいに明らかになってくる。ジェインの恋人ジャックは知識を何も持ちあわせない職人でただわめきちらしては (A roaring, ranting journeyman—“Crazy Jane Reproved”) 肉体の快楽に生きていた男だった。僧正はジェインに「彼のような男と畜生のように生きるのはよせ」と忠告する一方、ジャックを追放してジェインから遠ざけたのである。ジャックはもともと職人 (journeyman) であったが、追放されてからは、旅から旅をさすらうのを余儀なくされた旅人 (journey+man) になってしまったのである。彼は今では死んでしまっているが、ジェインはその時の僧正の偽善的なやり口、とりわけ、まだ一人前になっていなかったにもかかわらず、聖書を手にして権威ぶり、二人を畜生よばわりした事には我慢がなかったに違いない。世間一般に慈悲深いと考えられている僧正は現実には冷酷無情であった。彼はジェインとジャックを畜生のようにだと評したが、読者はむしろ僧正の方が人間味が欠け、畜生に近いと感じないであろうか。“fist”や“cry”などの喧嘩に関する単語が僧正の描写に使われているが、これらはもとより聖なる僧正には無縁の言葉であったはずである。彼には聖なるはずのバイブルも一冊の古い本にすぎなかった。このように考えてくるとレフレインの “The solid man and the coxcomb” はまた少し違った意味あいを帯びてくる。“solid man” なる僧正は堅さが高じて無情 (hard) になってしまった。(hand のかわりに “fist” ということばが用いられている事は「固い」という semantic context をつくりだすのにきわめて有効に働いている。) 従って “solid” は固いという意味は変わらないにしろ望ましくない implication を持つようになったのである。一方 “coxcomb” はもともと道化師がかぶるトサカに似た帽子を表わした事から、ここでは「道化師、おバカさん」という意味が浮かびあがってくるであろう。これは必ずしも悪い意味だけではなく、いくら僧正にいやな事をされても、あまり気にとめず、あくまで陽気であるという積極的な意味をも含んだことばなのである。

ブルーム (Harold Bloom) は「イエイツ」という本の中でレフレインの

“coxcomb”に言及し、「『伊達男、しゃれ者』という意味はジャックを非難することとしては適当でなく、むしろ『道化の帽子をかぶっている者』、あるいは『バカ者』という意味がよりふさわしい」と述べている²。しかしながらブルームはレフレインが各連でそれぞれ微妙にその意味を変えている事を見落しているようである。彼のようにレフレインを初めから終りまである一つの意味に固定してしまっただけではこの詩のおもしろさはほとんどなくなってしまうのではないだろうか。

第三連にはいると第一連の“blasted oak”の中の「枯れた」という意味が前面におしだされてくる。前の連では僧正の偽善が語られたが、この連では彼の肉体の醜さを描く事によって、あわせて精神的醜さをも示唆しているように思われる。特に彼の偽善は背中のこぶによって象徴されている。その隆起はもはや聖なるはずの法衣によっても隠す事ができない。しかも背中の隆起は不能の象徴でもある。ところが同じ隆起でもジャックのは前面にできる隆起であって生産的である。“A birch tree stood my Jack”なる異様なシンタクスは A birch tree was my Jack. と My Jack stood like a birch tree. をたして二で割ったような趣がある。この構文によってジャックの phallus を表わしたかばの木がジャックの全存在であり、その巨大な木がジャックを圧倒している感じがよくでている。

こう見てくると“coxcomb”は今度はとさか、あるいはけいとうのような phallus を意味してくるようになる。かばの木がジャックのものを表わすのなら、もう一つの木——枯れた櫟の木——は僧正のものを暗示するに充分であろう。こうなると僧正の描写に使われている「中空でなく、しっかりした」という意味の“solid”は枯れた“blasted”に対して逆説的に響くようになり、堅さを通りこしてひからびた（不能になった）という含みをもってくる。それにひきかえ、堅くがっしりしているのはむしろジャックの方ではないだろうか。

かくて“solid man”と“coxcomb”の言及対象がくるりと入れかわる。しっかり者で中が空洞でないのはむしろジャックであり、うわべだけはしっかりしているように見えるが実際は中身のないのは僧正なのである。ただ皮肉な事に、最終連では死んだジャックは魂だけになって出てくるため、この点では僧正は文字通り実体（肉体）をもった“solid man”だということになる。

これまでレフレインの “The solid man and the coxcomb” だけを見てきたので今度は括弧の中に入れられたもう一つのレフレイン “All find safety in the tomb” に目を移そう。このレフレインはジェインの語りの途中に強引に挿入されているため文の流れがせきとめられているが、そのたびにレフレインにこめられた影の声の意味を考えさせられるのである。そこでそれが挿入されている場所を調べてみるとその前後に危害、よからぬ事に関する記述が見られ、レフレインの中の “safety” “tomb” と互いに反応しあっている事に気づくであろう。具体的に見ていくと第一連では “blast” “stroke” “curse” などの暴力・呪いを表わす語³は “safety” と反対の響きをもち、“midnight” (真夜中は死の時間でもある) や “dead” は “tomb” と密接に結びついている。こうして第一連を読んでも「お墓におれば安全」なのはジェインに呪いをかけられそうな僧正だという事になる。第二連ではジャックが追放される事から「お墓におれば安全」だったのはジャックの方である。第三連に移ると僧正の肉体の醜さが描かれている事から、「もう年をとってこんなに醜いのだったら、僧正さん、お墓こそあなたにふさわしい、安全な場所ですよ。あそこならこれ以上醜くならないし年もとらないでしょうから」という皮肉めいた意味になるであろう。

第四連にはいると第三連の非常に肉体的な要素がうすくなり、かわって死んだジャックの魂がでてくる。このあたりの事情は「気がふれたジェインと職人ジャック」 “Crazy Jane and Jack the Journeyman” の二・三連を読むと少しははっきりしてくるようになる。

A lonely ghost the ghost is
That to God shall come;
I—love's skein upon the ground,
My body in the tomb—
Shall leap into the light lost
In my mother's womb.

But were I left to lie alone
In an empty bed,
The skein so bound us ghost to ghost
When he turned his head

Passing on the road that night,

Mine must walk when dead.

地上で恋をしなかった魂 (“a lonely ghost”) はすぐ神のもとへ行く事ができるが、地上で恋をした恋人同志の魂は死後、お互いを求めて地上をさまよい歩くというのである。これを第四連にあてはめて考えてみると、ジャックの魂はジェインに会うため地上でさまよっていてようやく檜の木の下で彼女と会う事ができるようになったものと想像される。肉体を愛しあっていた者の一方が死んで魂になってもなおお互い愛しあうというのは “Crazy Jane on the Day of Judgment” の第一連で「精神と肉体の両方を必要としない愛なんかには私は満足しない」と歌っている事と符合している。彼女は肉体と精神は分けられるものではなくて肉体を愛せば自然に精神をも愛する事になると固く信じていたのであった。こうしてジャックは彼女に会える事になったので、ジャックの魂もこれで安心して墓の中で休めるわけである。一方僧正の方は二人の仲をさこうとしてジャックを追放したのにもかかわらず、僧正（檜）は、意に反して二人が会う場所を提供するはめになってしまったのは皮肉としか言いようがあるまい。しかし見方を変えれば僧正もやっと宗教人らしい事をしてやったともいえるのである。これで彼も地獄に落ちる事なくどうにか神のもとへ行く事ができるだろう。彼も「墓の中では安泰」である。この皮肉は先に見た彼に関するもう一つの皮肉（ジャックが死んで魂になってしまったので、この点では僧正はジャックと比べて solid である）と重なりあって大きな効果を生みだしている。

以上見てきたようにレフレインは各連で微妙にその意味を変えてきたが、これを全体のコンテキストにおいて考えてみると、その意味するところは「僧正もジャックも墓の中にいれば（死んでしまえば）どんな危害も加わる事もなく、しごく安全である。聖職者であろうが、伊達男であろうが、人間、行きつく所は結局同じである。（だから僧正がでてきて、なんのかんのといって権威ぶるのはけしからぬ。）」という事になろう。“All find safety in the tomb” の “all” は僧正とジャックの両人を含んでいる事は勿論であるが、それが僧正の方によりよくあてはまる場合（すなわち僧正がお墓では安全といわれる場合）には必ず鋭い皮肉がこめられているのを忘れてはならない。こうして、もう一つのレフレイン “The solid man and the coxcomb” に見られる意味の変化と相呼応しながら、僧正によって代表される聖なるもの

と、ジャックによって代表される俗なるものの価値の転換がはかられるのである。

(Ⅲ)

「気がふれたジェイン、神について語る」においてもレフレインの果たす役割はきわめて大きく、その読みとり方次第で詩がよくもなったり悪くもなったりするのである。そこでやはりレフレインに焦点をあわせながら詩を読んでいこう。

Crazy Jane on God

That lover of a night
Came when he would,
Went in the dawning light
Whether I would or no;
Men come, men go;
All things remain in God.

Banners choke the sky;
Men-at-arms tread;
Armoured horses neigh
Where the great battle was
In the narrow pass:
All things remain in God.

Before their eyes a house
That from childhood stood
Uninhabited, ruinous,
Suddenly lit up
From door to top:
All things remain in God.

I had wild Jack for a lover;
Though like a road
That men pass over
My body makes no moan
But sings on:
All things remain in God.

この詩は全部ジェインのことばで綴られている。夜が来ると男達は彼女の肉体があたかも道路であるかの如く、勝手に踏み込んできては、朝、用がすめば彼女の気持も考えないでさっさと帰っていく。男達は来ては去り、去っては来るという風に、決して彼女のもとには留まらないのである。この事を彼女は「気がふれたジェインと職人ジャック」の中で「戸のかんぬきをはずせば恋はすぐ逃げていく。恋は夜の間にとかれる糸巻きにすぎない」と歌っている。

このようにみえてくると、レフレインの中の“remain”は“come”と“go”に対照されて「不変、不動」の意味が浮かびあがる。レフレイン全体としては「神のもとでは、すべてのものは行ったり来たりしないで、じっと留まっている」という事になろう。しかしながらこれは神の事で、我々生身の人間は来ては去るような愛のはかなさを甘受しなければならない。全詩を通じて“come” “go” “tread” “pass”などの移動、運動を表わす動詞や“road” “pass” “door”などの行ったり来たり、入ったり出たりするものを表わす名詞が非常に頻繁に用いられている事からも窺えるように、移ろいやすさ、はかなさは恋にはつきものである。しかも自動詞が圧倒的に多い事にも見られるように物事はジェインの意志とは無関係にどんどん進んでいく。特に“Men come, men go”には自分の意志ではどうする事もできない、あきらめの気持が感じとれるだろう。こう見てくるとレフレインは「すべては神の御意のままに」という意味に解する事ができる。最愛の恋人にも死にわかれ、毎晩男が欲望にまかせて入れかわり立ちかわりやってくる現実にはジェインにとってむなしい事に違いなかろう。彼女が「すべては神の御意のままに」といっても決しておかしくはないのである。ところが以上述べた事は表面上の事であって、ジェインの取る態度ではなかった。彼女は決してうめいたりせず、ただひたすら歌を歌い続けるのである。

それではなぜ彼女はこれほどまでに動じないで歌を歌い続けられるのであ

ろうか。これに対する解答が第二・三連で明らかにされる。とっくの昔にすんだはずの戦争(多分テルモピレーの戦いであろう)の現場では、今でも戦争が生々しく続いている。軍旗は空一面にはためき、軍馬はいななき、兵士達の峠の山道を踏みならす音が絶え間なく聞こえてくる。突然、兵士達の目の前にあった廃家にパッと灯がともる。いかにも狂人の語る幻想には違いないがそこには一段と深い意味がこめられていよう。「神の中では、過去のすべての事は決して消えさる事なく蓄積されて、永久に残る」(“All things remain in God”) からこそ一度見棄てられた廃家にも灯がともり、戦いがとっくの昔にすんでしまった峠でもまだ戦争が続いているのである。同様に死んでしまったジェインの恋人ジャックも神の心の中では生きづいていてと信じているため、彼女も動じないで歌を歌い続けられるのである。

第二・三連の裏には恋人ジャックとの忘れる事の出来ない肉体の結合やそのよろこびが暗示されているように思われる。狭い峠の山道 (“narrow pass”) や大きないくさ (“great battle”) には sexual implication がある事は明らかであり、軍馬のいななきは欲望のいななきにも通じるであろう⁴。さらに “tread” には(雄鳥などが)交尾するという意味があり、やはり裏に sexual implication を認める事ができよう。第三連の廃家はジェインの年老いた肉体をも暗示する。長い間住む人がなかったという事は恋人ジャックと死に別れてから久しいという事に対応するであろうし、家の戸口から上までパッと灯がついたというのは恋人ジャックとの歓喜を表わしたものであろう。

これらの事からも想像されるように、男達が踏みつけていくジェインの朽ちかけた肉体の中にひょっとするとジャックが生きづいていて、彼女の肉体がある日突然パッとよみ返るのではないかと信じつつ彼女は歌を歌い続けていると思われる。

この詩では “All things remain in God” (イタリックは筆者) とあるようにジャックも神の心の中に生きづいていてかの如く歌われているが、実際ジェインが歌い続けられるのは今見たように彼が神の心の中でなくて自分の肉体の中に生きづいていてと信じているからなのである。

かくて “All things remain in God” が何度も繰返されていくうちに、All things remain in my body という echo をも伴うようになり、ついに二つはいっしょに重なりあってしまう。このように神と彼女の肉体が重なりあい、それが同次元のものとして認識されている所にジェインの “crazy” ら

しさがあるのではなからうか。

以上見たようにレフレイン *All things remain in God*” には①「すべては神の御意のままに」②「すべてのものは神のもとでは不動で不変である」*remain=stay in the same place* ③「すべてのものは神の心の中では消えないでいつまでも残っている」(これは②によく似ているが *remain* の意味が微妙に違っている。 *remain=continue to exist*) ④「すべてのものは私の肉体の中で消えないで残っている」の幅広い意味、ないしは含みがある。はじめは①の「すべては神の御意のままに」という一見へりくだった姿勢がとられているように見えるけれども、実際はその裏に、彼女の肉体を神と同次元におくという驚くべき高姿勢(④)が隠されているのである。この①から④までの微妙な意味の変化が全体の詩の流れと調和している所がこの詩の生命といえよう。こうして神に対する姿勢が大きく変化することによって俗なるものの価値(彼女の肉体)が聖なるものの価値(神)へと転換するのである。

(IV)

最後に気がふれたジェインを扱った詩の中では一番大胆なことば使いで読者の度胆を抜く「気がふれたジェイン僧正と語る」“*Crazy Jane Talks with the Bishop*”をみてみよう。

I met the Bishop on the road

And much said he and I.

‘Those breasts are flat and fallen now.

Those veins must soon be dry;

Live in a heavenly mansion,

Not in some foul sty.’

‘Fair and foul are near of kin,

And fair needs foul,’ I cried.

‘My friends are gone, but that’s a truth

Nor grave nor bed denied,

Learned in bodily lowliness

And in the heart’s pride.

‘A woman can be proud and stiff
When on love intent;
But Love has pitched his mansion in
The place of excrement;
For nothing can be sole or whole
That has not been rent.’

この詩では、すでに胸もぺっちゃんこになり、もうすぐ血管もひからびて、まさにひびだらけにならんとするジェインにむかって僧正は「もう肉体も衰えた事だから天の館に住んで精神的・生活の中に喜びを見つけてはどうか」と勧める。これに対して肉体を愛する事が精神をも愛する事につながると信じているジェインは僧正の二分法的考えをとらない。詩の中では僧正の使ったことばをジェインがうけてもう一度彼女流に言い返す場面があるが、そこに今あげた相違が如実に表われているように思われる。

(Bishop): Live in a heavenly mansion,
Not in some *foul* sty.

(Jane) Fair and *foul* are near of kin,
And fair needs *foul*,...

(イタリックは筆者)

僧正は“foul”を一面的にとらえ、否定的な評価しか与えていないのに対し、ジェインはそれを“fair”と同次元におき、両者は分離できないものとして“foul”を積極的に評価する。

彼女はまた、物事を実体のない抽象的なものとして考える事は到底できないのだ。

(Bishop) Live in a heavenly *mansion*,

(Jane) But Love has pitched his *mansion* in
The place of excrement;

僧正が口にした「天の宮殿」は何と空虚に響くことだろう。それに比べてジェインの「愛の宮殿」は一生忘れる事ができないほど強烈な印象を我々に刻みこむのである。この違いは僧正は頭で考え、ジェインは肉体で考える事から生じるといってもいいであろう。

エリオットはダンを評して彼がテニソンやブラウニングと違う所は、抽象的な思考をバラの香りの如く直接的に感じとる事ができる点にあるといったのはあまりにも有名であるが⁵、これはジェインと僧正の違いにもよくあてはまる。ジェインは抽象的、哲学的思考を肉体行為の中に、具体的かつ直接的に把握する名人なのである。一見抽象的に見えることばでも、よく調べてみれば必ず確固たる基盤をもった肉体に根ざしており、実体のない宙に浮いたことばは何一つ見あたらない。我々が抽象名詞だと思いこんでいる “pride” もジェインの口にかかればたちまち肉づけされて肉体を表わすことばに早がわりするのである。

... (that's a truth)

Learned in bodily lowliness

And in the heart's *pride*.

(イタリックは筆者)

まずはじめの “pride” について直列の關係に注目してみると、その前に “heart's” がついている事からここではごく普通の「誇り」という抽象的な意味で使われている事は明らかであろう。今度は並列の關係に目を転じると、“heart's pride” と equivalent position にある句 “bodily lowliness” によって “pride” の持つもう一つの意味「性欲」「(特の雌の)さかり」⁶ が浮かびあがってくるのである。

一行あとの “proud” にしても sexual implication の強い “stiff” に影響されて、「ふくれた、膨脹した」⁷ という性的に興奮した状態を表わす意味を含んでいる。さらに「女が愛に夢中になっている時」の中に使われている “intent” も抽象的であるように見えながら、一行下の “pitch” という語の強い影響をうけて、「ピンとはった」という語源的意味 (in + tendere = stretch out, make tense) を有しているのである。

以上見てきた様に彼女のことばは具体的な肉体にその基盤をもっているが、勿論これは単語のレベルにとどまるのではなく、彼女が口にするすべての statement にもあてはまる。例えば「さかれてやっと一個の完全なものになる」(Nothing can be sole or whole/That has not been rent.) においては、単語レベルでも “whole” が肉体の “hole” にかけてあるが、文全体としても具体的な肉体行為の事実を表わしているのである。しかしながら、これは単に肉体に限られた事実だけでもない。“sole” は同時に精神を表わす魂 (soul) でもあり、この事は「肉体行為に精神も深く関与している」とい

うジェインの肉体・精神不分離の信念をよく反映している。このようにジェインのことばは肉体に根ざしたものであっても、肉体だけにとどまらず、その背後に普遍的真理を探る事ができるのである。“Fair and foul are near of kin/And fair needs foul” も肉体行為によってえられたものには違いないが、同時にまた肉体行為の域をでた普遍性をもつ真理としても通用するのである。

ところでこの普遍的真理の論理的基盤として、強力な逆説が重要な役割を果たしているのを忘れてはならないであろう。上にあげた「マクベス」の魔女のことばを思わせる⁸「きれいときたないは同じようなもの。きれいものにはきたないものがある」は具体的には次の事実をさす。

Love has pitched his mansion in/The place of excrement.

古い物を捨てさる排泄の場所が一転して新しい生命を生み出す場所になるのは皮肉な逆説以外の何ものでもないであろう。きれいなものもきたないものも同じ様なものであり、弛緩している状態ならばきたない排泄の場所が、いったん緊張すれば一転して美しい愛の場所、生産の場所となるのである。“proud” [(緊張して) ふくれた, 膨脹した], “stiff”, “intent” (ピンと張った), “pitch” などの緊張の縁語が連続して使われているため、この場面が非常に生々しく感じられ、この詩を迫力のあるものにしている。この緊張がまださめやらぬうちに次の「さかれてやっと一個の完全なものになる」という強力な逆説が続くのである。もっともこれらの逆説は我々にとっては逆説であっても、すべての対立概念(精神—肉体, 抽象—具体 etc.) が合一しているという立場のジェインにとってはもはや逆説ではありえないという事は心に銘記しておく必要がある。

以上見てきた様に、この詩では僧正が口にした抽象的な聖なることばは非常に空虚に響く結果、価値がおとしめられる。一方、ジェインのことばは卑俗に響くかもしれないけれども、肉体という確固とした基盤があるため普遍性を獲得して我々の胸に真に迫ってくるのである。

(V)

これまで三つの “Crazy Jane Poems” を中心に見てきたわけであるが、これらに共通しているのは聖なるものと俗なるものとの価値関係がレフレインやことばの多義性を媒介にして、だんだん逆転していく点にあった。この価値関係の逆転がジェインのうそのないことばで示唆された時、多くの読者

は「狂っている」のはむしろ偽善にみちた僧正や一般社会の方だと感じるはずである。すると彼女の前についている“crazy”の精神的欠陥を表わす第一義的な意味がうすれ、かわってそのもとの意味「ひびわれた」(O.E.D. ① full of cracks or flaws) が浮かびあがってくる。(初めは “Crazy Jane” のかわりに “Cracked Mary” が使われていた事もこの点に関して重要であろう。)しかしながら彼女の「ひびわれた」肉体には積極的な意味がこめられていて、そこには何一つ悲哀感はないのである。そのひびわれには自由奔放に肉体に生きた女の歴史が一つ一つ刻みこまれていて、そこに彼女の一生の縮図を見る事も可能であろう。それは十分に生きた者の満足のあかしであり、誇りなのである。

注

- 1 イェイツの引用はすべて *Collected Poems of W. B. Yeats*, 2nd ed. (London: Macmillan, 1950.) による。
- 2 Harold Bloom, *Yeats* (New York: Oxford University Press, 1970), p. 399.
- 3 “blast” は「枯らす」, 「呪いをかける」の他に「爆破する」という意味もあり, “stroke” はここでは「時計が打つ事」の意味だが他に「一撃」という意味もある。
- 4 “neigh” が欲望のいななきとして用いられている過去の有名な例としては次のようなものがある。

エレミア書 5—8 They were as fed horses in the morning; everyone
neighed after his neighbour's wife.

シェイクスピア: ソネット51

Therefore desire .../ Shall neigh ...

(イタリックは筆者)

- 5 T. S. Eliot, *Selected Essays*, 3rd ed. (London: Faber & Faber, 1951), p. 287.
- 6 O. E. D. “pride” の項11
- 7 O. E. D. “proud” の項 8
- 8 *Macbeth* (I, 1, 11) “Fair is foul, and foul is fair.”